On the Occasion of Resignation from the Editor-in-Chief

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/8413

編集委員長を辞するに当たって

On the Occasion of Resignation from the Editor-in-Chief

金沢大学医学部生理学第二講座
山　本　長三郎

私が十全医学会雑誌のお世話をすることがあろうとは夢にも思わなかったし，もしもそのような話があっても面倒だからお断りしようと永年思っていた．その気持を強引に変えさせたのは前委員長の橋本和夫教授である。「次期委員長という含みで委員になってほしい．イエスというまでここを動かぬ」と私の部屋に坐り込んでしまわれた．この穏かな先生がこう言われるのは余程お困りなのであろうと推察してお引受けすることになった．それから委員を2年と委員長を4年．引き受けた以上は一応のことはしなければと，投稿者の皆さんにはうるさがられ，講座主任の先生方の中には苦々しく感じられる方もいらっしゃるかもと思いつつ，熱い湯に漬かっているような年月だった．

査読を始めてみて気がついたのは，投稿されてくる論文の質の高さである。もちろん玉石混交ではあるが，国際誌に発表しても不思議ではない論文が沢山混じっている．これだけの研究ができる人に形式上の注文をつけて原稿を書き直して貰うのは気が引ける，と思うこともあった．しかし形式的に整った論文を書くことは大学院教育の総仕上げとして大切な訓練であるし，日本語で書くのも英語で書くのも原則は同じだから将来国際誌に投稿する時に恥をかかないようにする意味もあろう，と気を取り直して改善を求めたものである．

私が投稿者の皆さんに伝えたかったメッセージは，煎じ詰めればただ一つ，「個人の論文といえども公共の道具である学会雑誌に発表するには，ルールに従って書かなければなりませんよ」ということに尽きる。ルールには，すべての論文に共通のものと，雑誌ごとに定まっているものがある。前者には、正しい日本語で正確に要領よく書くという当然のことを始めとして，日英混交文を原則として書かない、図表の中の数字と本文中の数字を一致させる（馬鹿馬鹿しいほど当然のことだが，同じ事項に対する数値が表と本文とで異なる論文が珍しくない）など枚挙すれば限りない．後者は，文献の引用の仕方，単位の省略記号，章や節の分け方などで，投稿規定をみれば分かる．私は改善を求める場合に，原稿の該当部に記入すると共に，それがどのようなルールに基づいているかを別紙に箇条書きして投稿者に送っておいたが，果たして私の真意を理解して貰えただろうか．差し当たり学位論文さえ雑誌に載せることができれば用が足りると言わんばかりの投稿者の反応をみていると心もとない．学位をとって開業する人は二度と論文を書くこともないであろう．しかし大学や大きな病院の中堅幹部への道を歩む人達には，ルールに従って論文を書くという原則を理解してほしいとつくづく思う．臨床講座では教授が若い人を直接指導するのではなく，中堅幹部が研究グループの長になっていることが多いらしい．その中堅幹部の指導した論文の中に余りに酷いものがあるからである．投稿者の中には，何をどこで調べれば文献表中の正式誌名省略を知り得るか，さえ教えられていない人がいる．これでは，「浜の真砂は尽きるとも，悪論文の絶えることはない」という西田尚紀元編集委員長の嘆きが永久に続くことになる。

しかし私も偉そうなことは言えない．真面目な投稿者に迷惑をかけたのでは，と反省している．明らかな誤りは，昨年の投稿規定の変更と共に「自己チェック点」のプリントも改訂すべきところを気付かずに1年間従来の様式のものをそのまま配付していた点である．また，査読した委員のコメントが私の意見と合わぬ場合には調整に努めたが，一部チェック洩れのため不快な感じを投稿者が持たれたかもしれない．もしもそのような事があったとすればお詫びせねばならぬ．

私の在任中に十全医学会雑誌は奇しくも百巻の節目を越えた．これを機に版を大型にし、表紙を現代風に改めたが，次の百巻目を本誌はどのような姿で迎えるだろうか．学位制度は根本的に変わっているであろう．情報を紙に印刷して伝える方式が消滅しているかもしれない．時代の変化に耐えて本誌が逞しく育つことを祈るのみである．最後になったが，長年にわたって苦労を共にして下さった編集委員の諸先生と大橋勢津子氏に心から御礼申上げる．